新・山と花のたより 255号

２０２１年１１月１５日　　松尾　忠

メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp
ＨＰhttp://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com/

ススキ輝く曽爾（そに）高原と二本ボソ山（996m）

一ケ月振りの山歩き

封印していた山歩きを一か月ぶりに再開。11 月 10 日奈良県最東部の曾爾高原に出かけた。

近鉄名張駅前９:35 発のバス(季節限定)は 10:22 曾爾高原バス停に到着。10 分余り歩いて曾爾高原に。

ススキの穂のウエーブ

ススキは最盛期を過ぎた感じだが、雲の切れ間からの陽光に白く輝き、それが強い風を受けて波のように揺れ動いている。10:45 そのススキのウエーブの中を歩き出す。

一旦、お亀池のほとりに出て、身支度を整え、亀山峠への坂道をゆっくりと登る。池を中心に広がる草原とそれを包むかのような山稜の斜面でススキの穂が揺れている。広々とした景観を眺めながら歩き、11:15 亀山峠(標高 810m)に到着。

↑ルリセンチコガネ(オオセンチコガネ。動物のフンや屍骸を食べて生活。紀伊半島のは光沢のある美しい青緑色をしており、ルリセンチコガネと呼ばれている)

強い風吹く尾根道

峠に上がったとたんに帽子を吹き飛ばされた。幸い、帽子は峠の反対側の登山路に落ち、近くに居た若いカップルの男性が素早く駆け下り、拾ってくれた。若者に礼を言って、傾斜のきつい尾根道を北へと登り始める。若いカップルも登り始めたが、見上げる傾斜と岩場に女性が尻込みし、諦めて下って行った。足元でルリセンチコガネが動いている。もう 11 月なのにまだ活動しているのだ。

入山料の要る山

強風に煽られながら急傾斜の路を慎重に登る。岩や路面が雨に濡れていて滑りやすい。12:05 日本ボソ山(標高９９６m)に到着。山頂の手前に小屋が建っており、そこに登山料金を入れる箱が設置してある。この山は入山料が要るのだ。有料の山と言えば、奈良県下では三輪山とここだけか。二上山雄岳も以前には有料だったが、今は無料になっている。

５００円玉を投入して頂上に向かう。

↓二本ボソ山にて(背後に尼ケ岳と大洞山)

眼前にひろがる三重県の山々

山頂にはケルン様のものがあり、山名板がおかれている。倶留尊(くろそ)山(1038m)が間近に迫り、東南方向に尼ケ岳(伊賀富士)がスッキリした山容を見せ、その手前に大洞(おおぼら)山が大きな山塊を横たえている。

倶留尊山登頂を断念

倶留尊山は指呼の間の感じだが、往復一時間はかかる。倶留尊山登頂を断念して引き返すこととした。

亀山に連なる稜線を歩く

亀山峠に戻り、南側の亀山(849m)に向かう。亀山を含むこの稜線は緩やかな起伏をもって南北に連なり、その東側は、雑木林や針葉樹林となっており、西側は急斜面にもかかわらず一面のススキ原で、池の周囲と一体となって曽爾高原をかたち作っている。

花は少なかった

強い風は樹々の梢を鳴らし、ススキ原を揺らし続けている。

刻々と変化する高原の景観を楽しみながら、池の南の端に降り立ち、池を一周するが花は少なく、数株のリンドウとアザミが目にとまっただけ。

15:27 発のバスで、曾爾高原を後にした。

↑リンドウ

ヘビをいじめないで　②

美しいヘビ

もう３０年も以前の事だが、二上山の登山道で一匹の蛇に出逢った。小さいが全身が濃い赤橙色で美しい蛇だった。何枚か写真を撮ったのだが、どう探してもその写真が見つからない。

最近出逢ったジムグリ

右の写真は今年１０月初旬に同じく二上山で出逢った蛇で、大きさ、体色・紋様から見てジムグリだと思われる。この写真は掲載するにあたってコントラストを強めているので、実際よりもオレンジ色が鮮やかになっている。この個体も美しいが、３０年前のものはもっと赤かった。ジムグリは幼蛇ほど色が濃いとされているから、その差なのかも知れない。

無毒・無害

赤いので「有毒」と思う人もいるかと思うが、ジムグリは無毒でおとなしい。種名が示すように地中で暮らすことが多く、ネズミや小動物を主食としている。ちなみにほとんどのヘビがネズミを食べる。「ネズミ算」の語があるように、ヘビが居なくなったら、ネズミの激増で自然界のバランスは急激に崩れるだろう。

改めて「**へびをいじめないで**」‼

蛇伝説の多くは「ヘビ恐怖症」によるもの

桜井市の箸墓古墳は卑弥呼の墓ではないかと騒がれているが、この古墳にまつわる伝説は蛇が人間の男に化けて女性の夫になる話で、美しい蛇からの連想ではないだろうか。ただ古今東西、世界の蛇伝説の多くは「遺伝に基づくヘビ恐怖症」が根本にあると思う。